

謡曲〈忠度〉論

——「文武二道」の武人シテ忠度の造型——

岩城賢太郎

一 忠度を「文武二道」の武人と称えること

謡曲〈忠度〉八段は、次のような「クリ」・「サシ」から始まる。¹⁾

「クリ」²⁾地舞けにや和歌の家に生まれ、その道を嗜み、敷島の蔭に寄
つしこと、人倫において専らなり。

「サシ」ワキ中にもこの忠度は文武二道を受け給ひて世上に眼高し、
地舞地舞そもも後白河院の御宇に千載集を撰はる、五条の三位

俊成の卿、承つてこれを撰ず。

「クリ」において『古今集』真名序の「動天地。感鬼神。化人倫。和夫婦。莫宜於和歌。」を踏まえた人の道として歌道が称えられ、続く「サシ」で平忠度の素質が語られ、『平家物語』「忠度都落」へと内容が移っていく。

ここで注目したいのは、「サシ」の「この忠度は文武二道を受け給ひて世上に眼高し」という詞章である。ここで忠度が「文武二道」を備えていたと称えるのは、何故なのであるうか。又、そもそも忠度が「文武二道」を備えたとは何を意味するのであるうか。室町末期の謡曲に関する最初の注釈書である『謡抄』にも、「文武二道ヲウケタマヒテ 文ハ文学ノ道也。武ハ武芸ノ道ナリ。」³⁾とあるが、忠度が天賦の才能として「文武二道を受け」たという詞章は、単純に本説である『平家』の忠度像を踏まえて書かれたと考えると良いだろうか。

謡曲〈忠度〉は、応永三十一(一四三三)年二月の奥書を持つ世阿弥の『三

道』に「近来押し出だして見えつる世上の風体の数々」のうち、軍体の作品としてその名が掲げられ、永享二年(一四三〇)十一月奥書『世子六十以後申楽談儀』に、「道盛・忠度・よし常、三番、修羅がよりにはよき能也。此うち、忠度上花敷」と見えるように、世阿弥の自信作であった。その〈忠度〉において、シテ忠度が「文武二道」の人とされたことは注目されることである。

『平家』の描く忠度と謡曲〈忠度〉に関する多くの先覚の論考を踏まえつつ、いま一度本説『平家』の忠度像を分析し、シテ忠度における「文」と「武」とが、それぞれ何を指すのか、特に、これまであまり積極的に論じられることのなかった武人としての忠度の造型に注目しつつ、この「文武二道」という詞章の意味するところを考察し、もって謡曲〈忠度〉の目指すところについて私見を示してみたい。

二 本説としての『平家物語』

まず、修羅能の本説として『平家』をどう位置づけるべきか考えておく。謡曲の本説としての『平家』について、世阿弥は『三道』において「一、軍体の能姿。仮令、源平の名将の人体の本説ならば、ことに平家の物語のまゝに書べし」と述べている。このことばの意味するところについて、琵琶法師の語る『平家』の話のとおり書け、又、『平家』を享受した人々の気持ちをよくよく考えて書け、などの先覚の解釈がある。

〈忠度〉の本説としての『平家』について、山下宏明氏は、⁴⁾「中院本・一方流本に近い。一部不明の箇所あり」とされ、加美宏氏は、⁵⁾「読み本系諸本や南都本、『源平闘諍録』の本文にも注目され、「世阿弥独自の構想や趣向とされているものにも、案外、『平家物語』とくにその読み本系(増補系)」といわれている諸本の説話などに、その発想の契機を負つ

ているものがありそうな気がする」と指摘しておられる。謡曲《忠度》に限らず、謡曲の本説としての『平家』には、語り本だけでなく、源平盛衰記などの読み本との関係を指摘される論考も多い。

尤も、語り本との関係を指摘する論考は多い。しかし、例えば世阿弥作であることがほぼ確かな（実盛）や（鶴）のように、詞章が『平家』の本文と多く一致するような引用型の曲の存在することを考えると、琵琶法師の語る『平家』のみが謡曲作者の『平家』の取材源であったとは考えにくい。又、室町時代の京都では、一方系、八坂系の双方の琵琶法師の語る『平家』が広く享受されていたこと、本説と考え得る素材が複数の『平家』諸本に跨っている曲があること、などを考えても、謡曲作者が手許にある特定の一本の『平家』を置いて曲を作ったとも考えにくい。

『平家』は本文を異にする諸本が多い作品であるが、様々な諸本との関係が指摘される謡曲も存在するなかで、各曲の素材を全て備えた未確認の『平家』の存在を想定するのは不自然である。やはり、完本でなくとも、謡曲作者は複数の『平家』を、語りものとしても読みものとしても享受できる環境にあり、謡曲の創作には複数の『平家』が関わっていた、と認識する必要がある。従って、謡曲の作品研究において『平家』諸本の本文を検討した上で論じることが、諸本に跨って存在する謡曲詞章の素材を確認した上で、謡曲作者が本説『平家』をいかに採り入れどのような創作を加えたか、謡曲作者独自の創作点を抽出するために有効であると考ええる。

本稿では、《忠度》の本説として、『平家』諸本から、読み本系の延慶本・長門本・四部本・盛衰記、読み本系と語り本系の中間的性格を有するといわれる南都本、語り本系として中院本・城方本・百廿句国会本・百廿句斯道文庫本・屋代本・平松家本・鎌倉本・覚一本・高野本を考察の対象とする。これらの『平家』諸本を検討するのは、《忠度》の本説としての『平

家』本文を特定するためではなく、『平家』諸本を分析した上で、本説の世界との距離を測定して、《忠度》においてどのような創作が加えられているか、謡曲作者独自の創作を見極めるためである。⁽⁷⁾

なお、《忠度》の作者は、『申楽談儀』にその古名（薩摩の守）が「世子作」とされていることなどからして世阿弥であると考えて差し支えない。しかし、現存する本文をもって、世阿弥の手になる《忠度》そのものという保証はなく、本稿において《忠度》における創作として指摘したところをそのまま世阿弥の功績として位置づけることには些か躊躇する。そのため、本稿で《忠度》の作者について論及する際には、「世阿弥」とはせず、敢えて「謡曲作者」と記すことにする。

三 『平家物語』諸本にみえる平忠度像

『平家』において忠度が登場するのは、仮に覚一本に従うと、巻五「富士川」、巻七「忠度都落」、巻九「忠度最期」の三章段である。「富士川」には内裏女房と忠度の歌をめぐる話が収められ、「忠度都落」には歌をめぐる忠度と藤原俊成の話が収められている。共に、歌人忠度の姿が際立つ章段である。これに対して、「忠度最期」では源氏方の岡部六弥太に討たれた忠度の最期のさまが描かれ、武人忠度の姿を窺うことが出来る。

「忠度都落」の章段については、多くの論考があり、新しく追加する材料を持たないが、『平家』諸本からごく一部を掲げ、簡単に歌人としての忠度の側面を見ておきたい。

次に掲げるのは、忠度が詠草の巻物を託して俊成と別れる場面である。三位ひらきて見たまへば、百しゆのうたをぞかゝれたる、三位いまに はじめぬ御事とは申ながら、かゝるそうげきの中に、おぼしめしわすれぬ、御心ざしありがたく存候、ちよくせんの事にきては、ぐしん

がうけ給はり候ぬれば、きやうこそのさた候はど、そりやくをぞんずべからずとのたまひければ、さつまのかみ、大によるこび給て、いまは、野辺にかばねをさらさばさらせ、さうかいのそこにも、しづまばしづめ、こんじやうに、おもひをく事候はず、此世のわかれこそ、唯今ばかりにて候とも、来世にては、かならず一所へまいるあふべし、さらばいとま申てとて、いでられければ、…

(中院本巻第七「さつまのかみの歌の事」)

三位是をあけてみて、「かゝるわすれがたみを給をき候ぬる上は、ゆめくそらくを存ずまじう候。御疑あるべからず。さても唯今の御わたりこそ、情もすぐれてふかう、哀もことにおもひしられて、感涙おさへがたう候へ」との給へば、薩摩守悦で、「今は西海の浪の底に、しづまばしづめ、山野にかばねをさらさばさらせ。浮世におもひをく事候はず。さらばいとま申て」とて、馬にうちのり、甲の緒をしめ、西をさいてぞあゆませ給ふ。…

(高野本巻第七「忠教都落」)

三位、感涙を流し、これを受取り、「御詠一卷預り置き候ひ畢んぬ、これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南のためか。この総劇の中に御音信に与かる事、恐悦少なからず候ふ哉。縦ひ浮生を万里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅撰の時は思ひ出で侍るべし」と宣へば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふ事なしとて、馬に乗り、…

(盛衰記巻第三十二「落行く人々の歌附忠度淀より帰る俊成に謁する事」)

俊成は、世が静まって再び勅撰集撰集の宣旨があつた時には、託された巻物の歌を勅撰集入集の歌の候補としてしかと見極めることを約する。それが語り本系に見られる「そりやくをぞんずべからず」(中院本という俊成のことである。ところが、盛衰記では、俊成は忠度の預けた巻物を「永

代秀逸の御形見、未來歌仙の指南のため」と恐縮して受け取り、その詠草にも目を通さぬ内から、歌道における至宝のように扱う。

当時の歌道の大御所的存在であつた御子左家の俊成は、忠度にとつては歌道における師匠にあたる人物であつたはずだが、盛衰記では、もはや師弟の關係を二人に見るのは不自然なほど、忠度は俊成から歌人として崇められていた。平氏は貴族化してはいたものの、忠度は歴とした武家の人間であり、歌道はその好んだ道に過ぎないはずである。盛衰記は『平家』諸本中에서도最も脚色の色合いが濃く、忠度を当時の歌壇の指導者的立場にあつたほどの歌人に仕立ててしまふ。

盛衰記は、この他にも、忠度を優艶な王朝歌人と描く傾向が強い。例えば、この後に内裏女房との邂逅を描いた話を収める。この説話は延慶本、南都本等の『平家』(長門本・四部本、語り本系は巻第五「富士川」)に相当する部分に収められているが、「かしがまし」の歌を全句は収載せず、忠度の人を語る簡略な一挿話となつている。『今物語』二話、『十訓抄』一ノ十六話、『古今著聞集』巻第八(忠度の名は出てこない)に見られる類話と比べて、分量は圧倒的に他の類話を上回り、しかも盛衰記のみに見られる特徴を持つている。

少々長くなるがこの盛衰記の話の部分を全文掲げる。

この忠度、内裏の女房に心を移して、年頃通ひ給ひ、情深き仲なりけるに、かの女房眉形類なく、心の色世にありがたしとほのめきければ、高倉院も思し召し入れさせ給ひて、忍びて時々御幸あり。忠度は年頃の知人なり。院は日浅き御事なり。天の戸渡る織女の会ふ夜希なる秋の夜の、月の光もさやけて、虫の音絶え絶え音信れたり。折知りがほに道芝の露置きそむる夕暮に、高倉院この女房の許へ御幸あり。忠度いかでか知るべきなれば、夜更け人定まつて、その夜同じく

通はれたり。院は先よりの御幸なれば、女房は御前にて御物語あり。

忠度は後におはしたれば、かくとも知り給はねども、左右なく入り給はず。人の出でよかし。かくと言ひ入れんとおぼしけれども、御幸の折節なりければ、如何にと咎むる者もなし。忠度かなたこなたを立廻り、御前近き御縁に良久しく立ち居給ひ、扇をぞつかひ給ひける、蚊目のきりきりと御前へ聞えけり。院も怪しく思し召す御気色なり。女房は、忠度の来れるにこそ、かくと告げまほしく思はれけれども、院に憚り参らせける上は、人して言ふべき便もなし。忠度の待つらん事も痛はしく、折節、骨なき事をも知れかしとて、女房何となき口ずさみの様に、「野もせ」と仰せられければ、忠度、扇をたたみて、ひそかに帰り給ひにけり。後にこの女房に逢ひたりけるに、「さても一日は如何に」と問ひ給へば、忠度、「骨なきぞ、かしがましと仰せ候ひしかば、帰りてこそ」とぞ答へたる。女房又宣ひけるは、「人して申したる事もなし。何をしるしにてかくは思し召しけるぞ」と言へば、「野もせ、と仰せ候ひしかば帰りぬ」と、「源氏夕顔の巻に、

（巻第三十二）「落行く人々の歌附忠度淀より帰り俊成に謁する事」

盛衰記は他本に「宮バラノ女房」(延慶本とある女房を、「高倉院も思し召し入れさせ給ひて、忍びて時々御幸あ」る女房、つまり高倉院の寵愛

を得ていた女房という設定にしている。そして、高倉院が女房の局へ渡っている際に偶然忠度が来合わせたものとして、院の寵愛する女房に密かに通うという、他本にはない緊迫感を交えて本話を展開する。このような設

定で展開することによって、盛衰記は本話に王朝物語に見られる「とき色彩を盛り込む。藤壺中宮や胤月夜の君と関わり須磨に退去せざるを得なくなった『源氏物語』の光源氏や、東宮の寵愛を受けていた宣耀殿女御と関わった『狭衣物語』の狭衣中将のような貴公子の印象が、忠度に自然と重ねられるのも、構想の内なのである。それ故か「かしがまし」の歌を、敢えて『源氏物語』夕顔巻に載せるとする。この歌は『新撰明詠集』等に収められているものであって、小式部内侍本『伊勢物語』や『うつほ物語』藤原の君巻(二句は「草葉にかかる」となっている)等の王朝物語に多く引用されてはいるものの、『源氏物語』には見えない。しかし、盛衰記において、忠度の人物像は王朝物語の貴公子的に増幅されているといえる。このように、盛衰記では、もはや他の『平家』諸本には見られないほどに、忠度の優艶な歌人としての造型が行われ、新たな忠度説話が創出されているのである。

又、中院本には「此世のわかれこそ、唯今ばかりにて候とも、来世にては、かならず一所へまいりあふべし」と、城方本には「縦此世の別こそ唯今ばかりにて候共来世にてはかならず一佛浄土の縁と参りあひ参らせ候べし」と、百廿句国会本・百廿句斯道文庫本にも同内容の本文があるが、これは不自然な本文である。例えば、処刑に向かうという夫が妻に向けて掛けるような、あるいは恋人の間のことばのごとくである。それを忠度が和歌の師である俊成に向かって発するのである。さらに、死を決して都を落ち行く忠度が、俊成と浄土で再会することを確信するには、白楽天の詩文にあるような、狂言綺語観をもつてでもしなくては、あり得ないことである。西国へ落ち、やがて戦場に向かう武人忠度が、その現世での闘戦の業を翻すほど、歌人としての徳を積んだ人物として位置づけられていると読むべきであろう。

中院本等の語り本系『平家』や盛衰記の「忠度都落」の章段が、かくも強く、歌人忠度の側面を語っていることを確認しておきたい。

次に、「忠度最期」の章段における忠度の武人としての側面を見たい。

安田元久氏は、血縁としては一族の傍流的地位にあった忠度は、実際には、諸国の征圧に副將軍格として加わり、武人として活躍する面が大きかったであろうと論じておられる。『平家』の中で、その武人忠度の姿に最も注目するのが「忠度最期」の章段である。語り本『平家』の「忠度最期」は、忠度を哀悼する念の強いものであるが、もともとこの章段はそういった性格のものではなく、延慶本等の読み本『平家』のように、忠度を討ち取った岡部六弥太忠純の勲功譚という性格が強いものであったらうと早くから指摘されている。

ここでは、南都本の「忠度都落」に相当する本文について検討し、読み本系から語り本系へという「忠度最期」の章段の性格の変遷を考えたい。

薩广守忠度ハ赤地ノ錦ノ直垂ニ火威ノ冑ノツマ取リタルニ白星ノ甲居頸ニキナシツ、（讀）ノ本白ノ征矢十八指タル頭高二負ナシ所藤ノ弓ノ勝レテ太カリケルヲモチ金作ノ太刀ハキ黒キ馬ノ太フタクマシギニ銀伏輪ニ金ニテ速鷹打タル鞍置テノ乗レケル。明石ノ塩干ノ渚ヲ心細クモ只一騎西ヲ指テ落給フヲ武藏國ノ住人岡邊ノ六矢太忠澄主従二騎ニテ追懸タリ。ココニ落給ハ大將軍トコソ見奉レ。イカニマサナク敵ニ御後ロヲバ見セ給フソト申ケレバ薩广守是ハ御方ゾヤアヤマチスナトゾ宣ヒケル。見歸リ打アヲノキタル内甲ヲ見入タレバ色白キ俗ノカネ黒ナルガ年卅四五ニゾ見ヘタリケル。忠澄御方ニカネ付タル人ハナキ物ヲト思ヒケレバ押ナラベテ躰テ組ンデソ落ニケル。薩广守落付ト同ク腰ノ刀ヲ抜テ忠澄ヲ三刀マデコソサ、レケレ。二刀ハ物具ノ上ニテト

ヲラズ今一刀ハ忠澄ガ口ヨリ小耳ノ根ヘ指トヲサレタリケリ。郎等落合テ太刀ヲヌキ薩摩守ノ右ノ小ガイナヲ脇ヨリフツト切落ス。忠澄是ヲ見テ力ヲエテエイ聲ヲタテオキアガリツ、薩摩守ノ冑ノ袖ニ取付タリ。薩摩守心靜ニ西オガマセヨトテ左ノカイナニノセテ一丈バカリソナゲラレタル。其間ニ西ニ向キヒザマツキツ、高聲ニ光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨ト唱テ念佛十返バカリ申シ給ケレバ郎等寄テ頸ヲウツ。誰ナルラント思フニエビラニ物ノ見ヘケレバ取テ是ヲ見ルニ短尺ナリ。見レバ旅宿ノ花ト云題ニテ

行暮テ木ノ下陰ヲ宿トセバ花ヤ今夜ノアルジナラマシ

忠度トカ、レタリ。其頸ヲ大將軍ノ御前ヘ持テ參テ此由申タレバサテコソ太政入道殿ノオトノ薩广守忠度トハ知リタリケル。ソレニ依テ忠度ノ知行シ給ケル大庄五ヶ所有ケルヲ忠澄勲功ノ賞ニ給リケリ。（卷十一「生田森合戦事付梶原二度懸事」部分）

六弥太の武勲譚としての「忠度最期」の性格は、延慶本・長門本・四部本等の読み本系や南都本などの結末部分「忠澄、兵衛佐殿ニ見參ニ入テ、勲功薩摩守ノ年来知行ノ所五ヶ所アリケルヲ、忠澄ニ給テケリ」（延慶本）、「其頸ヲ大將軍ノ御前ヘ持テ參テ此由申タレバサテコソ太政入道殿ノオトノ薩广守忠度トハ知リタリケル。ソレニ依テ忠度ノ知行シ給ケル大庄五ヶ所有ケルヲ忠澄勲功ノ賞ニ給リケリ」（南都本）に色濃くあらわれている。それは、武士が主君からその自らが討った相手の知行していた領地をもつてその勲功を称えられるというかたちであり、六弥太勲功譚の中核として、ここに合戦を事とする武士の現実を見ることのできる。忠度哀悼の意を強く押し出した語り本諸本がこの経緯を採り入れなかったのは、当然ともいえよう。

又、その合戦場の現実の武士の姿を思わせるのが、読み本系や南都本に

描かれる六弥太の姿である。一の谷の渚を西へ落ちて行く忠度を追つてきた六弥太が、己に背を向け逃げようとする忠度に「源氏ノ大將軍ニハカネ付タル人ハオワセヌ者ヲ。キタナクモ敵ニ後ヲバミセ給物カナ」(延慶本)、「ココニ落給ハ大將軍トコソ見奉レ。イカニマサナク敵ニ御後ロヲバ見セ給フゾ」(南都本) という非難の言を吐くところに、一介の侍たる六弥太が勲功に勇む必死なさまが読み取れる。この六弥太の「キタナ」しという忠度への評語は、延慶本・長門本・四部本の説み本に見られる。

忠度については、先ずその容姿についての美しさを語ることに注目したい。忠度の鉄漿は、合戦場にあつては敵味方を判別するしるしとしてはたつき、又、貴族化した平家の公達の象徴ともなっており、四部本を除く説み本系諸本にも見られるものである。しかし、「色白キ俗ノカネ黒ナルガ年卅四五ニソ見ヘタリケル」(南都本)、「かねぐるに、色しろく、いいうに見えられけり」(中院本)、「かねくるにうすげしやうをぞし給ひける」(城方本) というように、忠度に美的要素を加えてゆくのは、南都本・語り本系諸本、盛衰記における趣向の一つである。「富士川」の章段においても、美男として著れの高い維盛の姿に続き、忠度の出立ちが描かれ、そこに内裏女房との歌の贈答が続き、忠度の貴公子的優艶さは増幅されている。これは特に盛衰記において顕著であり、先に「忠度都落」について述べたように、忠度をより優美に描こうとする意向が、盛衰記に最も強くあらわれている。以上の点は、忠度の姿を、権威ある歌人として、より崇高なものとして描いた「忠度都落」の語り本の意図と一連のものとして見てよい。忠度の歌人像がより深化した結果である。

次に、「忠度最期」において忠度哀悼譚の中核をなしたと思われる、武人としての忠度像の変遷について考えてみたい。延慶本と語り本系諸本を比較してみた場合、最も大きな相違点は、討ち死に間際の忠度の姿である。

延慶本・長門本・四部本・盛衰記の忠度は、「ウヘニ乗キテ取テ押テ、「誰人ゾ。名乗給ベシ」」(延慶本)と、最後までその名を名乗ることを求める六弥太を拒み、「己レニ合テ一度モ名乗マジキゾ。己ガ見知ラヌコソ人ナラネ」(延慶本)と、平家の大將軍らしくあくまで誇り高く、侍格の六弥太を自分の敵としては釣り合わないものと嫌う。もはや六弥太に討ち取られることは避けられない状況に至っても、「サリナガラモヨキ敵ゾ。定勸賞ニ預ラムズラムゾ」(延慶本)と、忠度は気位では六弥太に屈することはなく、猛々しい武人として生を全うする。六弥太と忠度の互いの力のぶつかり合いを通して、武人をもつとも武人らしく描いているといえよう。

四部本の忠度の名が明かされた後の「熊野にて成長ち、心も豪に吉き人にて在しけり」という語句は、忠度の六弥太との組討ちの、武人としての誇り高い、剛勇な最期のさまを指している。しかし、延慶本は「アレコソ太政入道ノ末弟、薩摩守忠度ト云シ歌人ノ御首ヨ」と、「人」に忠度を明かさせる。この「歌人」ということばをもって、それまでの「忠度都落」等の忠度の歌人像を引き継いではいないが、この延慶本の「忠度最期」に載る忠度の姿は、武人として以外のなものでもない。因みに、延慶本と四部本は忠度の「行き暮れて」の詠を載録しないのである。

ところが、南都本・語り本諸本、盛衰記に描かれた忠度は、いよいよその最期という時に至り「今はかうとやおもはれけん、「しばしのけ、十念となへん」とて、六野太をつかうで、弓だけばかりなげのけられたり。其後西にむかひ高声に十念となへ、「光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨」とのたまひ」(高野本) というように、六弥太を投げ除け、西に向かつて臨終の念仏を唱えるのである。武人の猛々しさのみをもって死に向かうのではなく、死に向かう作法を整え、阿弥陀仏に極楽浄土への引續を願って、己の死を冷静に迎える。本話に周囲の敵味方双方の武人の直接の忠度哀悼

のことばの見られない中院本においては、この念仏の後、六弥太が箆に見つけた忠度の「行暮れて」の詠をもつて「忠度最期」の話は閉じられる。

「忠度都落」の章段において「来世にては、かならず一所へまいるあふべし」（中院本）と、俊成と来世での再会を約した中院本においては、この忠度の最期の念仏の様は示されて然るべき姿である。「忠度都落」の章段の忠度像と一連のものといえる。例えば延慶本のように、合戦場で武人として猛々しきをもつてのみ最期を迎えた忠度が危険を冒して都に戻り俊成に己の歌を託したという人物造型と結びつき、歌道の大神所俊成と同じく、一仏浄土へ行き合うことが、違和感無く素直に受け容れられるだろうか。語り本系のこの最期の十念は、単に阿弥陀仏に往生を願うという忠度の信心のさまを描くに留まらず、歌人としての「忠度都落」の忠度像を引き継ぐものであり、歌人としての忠度の姿を補強する意味をも担っている。中院本が、忠度の「行暮れて」の歌の後、あえて周囲の武人からの「あつぱれ薩摩守の殿は歌道にも武藝にも儼にやさしき大將軍にておはしつる者を」（城方本）というような哀惜のことばを借りないで「忠度最期」の話を閉じた意図も、理解できるように思う。つまり、中院本はこの忠度の十念と歌をもつて、「忠度都落」からの歌人としての忠度像を忠度の最期のさまに十分に引き継ぐことが出来たといえる。この意味において、語り本系の忠度の最期の十念はなくてはならない忠度の姿であった。

いま、忠度の十念を「忠度都落」の歌人忠度の姿と連なると述べたが、これは、自らの死を仏道への信心を示して迎えるという姿に、語り手がひとつの武士の理想像、或いは武人の死に対する美学とでも言うべきものを見出したからでもある。延慶本に見られるような、大將格の武人として気高く猛々しきをもつて深く死を迎えるさまよりも、心乱さず十念を唱え、阿弥陀仏に縋って死を迎える、仏道への信心を備えた武人のさまが、

理想的な武人の武勇、死にざまとして尊ばれたということであろう。それ故、延慶本・長門本・四部本にみられる「メテノカヒニテ六矢田ヲノセテ、三イロバカリ被投タリ」（延慶本）という、忠度の剛勇な戦い振りは、語り本系や南都本にあつては、「薩摩守心静ニ西オガマセヨトテ」（南都本）というように独り心静かに念仏を唱える間を得るための行為となつていく。こうした点を考えると、忠度の最期の十念は、歌人としても武人としても理想的な人物として忠度を語るためにあつた姿なのである。忠度の十念とその遺された詠草をもつて、武人としての、そして歌人としての忠度を称えるという構想が、語り本系諸本、そして南都本の忠度哀悼譚の骨格であつたといえる。

尚、本稿では前節において、南都本を読み本系と語り本系との中間的性格を有する本と指摘した。しかし、この忠度譚における南都本は、本稿が語り本系の特徴とした本文と読み本系の特徴とした本文との双方を備えた本文を有しており、読み本系から語り本系へと忠度譚が推移するさまが反映されているというわけではない。中間的性格というよりは、双方の性格を兼備した混合的本文といった方が適切かも知れない。その意味では、記事の量は全く違うが、盛衰記に近い性格があるといえるのかも知れない。

以上、『平家』の読み本系から語り本系へ、六弥太勲功譚から忠度哀悼譚へという「忠度最期」の変遷をみてきたが、諸本間には細かな差異はあるものの、この大きな流れとしての変遷が六弥太の物語から忠度の物語へと明確には位置づけられないところにこの話の不完全さが感じられる。それは、中院本を除く語り本系諸本にある「太刀のさきにつらぬきたかくさしあげ、大音声をあげて、「この日来平家の御方にきこえさせ給ひつる薩摩守殿をば、岡辺の六野太志純がうちたてまつたるぞや」と名のりけれ

ば」(高野本)という、討ち取った忠度の首を掲げての六弥太の勝ち名乗りによるものと思われる。この名乗りは読み本系諸本、南都本には見られないもので、城方本・百廿句国会本・百廿句斯道文庫本・平松家本・鎌倉

本等の語り本に見られる。これは、その名乗りを聞いた戦場の源氏方と平家方双方の武士の「あないとをし、武芸にも歌道にも達者にておはしつる人、あたらず大將軍を」(高野本)という忠度哀愴の涙を引き出す役割を担っているのであるが、結果的には六弥太の勲功と忠度への哀悼の念の二つの事柄が混在してしまふ本文となっている。高野本の「この日来平家の御方にきこえさせ給ひつる」という本文は、城方本には「此日比平家のかたにさしも聞こえさせ給ひたる」と、平松家本・鎌倉本では「此頃日二平家ノ御方ニ鬼神ト聞ヘサセ給ヘル」(平松家本)とあり、忠度は鬼神にも喩えられるほどになっている。これも討たれた忠度の武人としての資質をより高いものとして描き、つまりは討たれた忠度を哀悼する意図に繋がるわけであるが、逆に、それほどの大將軍を討ち取ったという、勲功をより高いものとして位置づける、六弥太の自信に溢れた勝ち名乗りともなっているのである。

こういった語り本の性格が、忠度哀悼譚という一貫した方向で「忠度最期」を読み通しにくい要因となっている。語り本は「武芸にも歌道にも達者」な、文武兼備の人として忠度を描こうと、忠度辞世の詠や最期の正念のさまを中核に本文を形成し、忠度哀悼譚への方向を示してはいる。しかし、「忠度最期」の章段が意図して語ろうとするものは、ともすると不明瞭に感じられてしまふ脆さを有しているといえるのである。

四 「文武二道」ということ

次に、『平家』「忠度最期」の分析を踏まえ、冒頭に掲げた謡曲(忠度)

八段の「中にもこの忠度は文武二道を受け給ひて世上に眼高し」という詞章について考えたい。

先ず、この「文武二道」ということばについて考えてみる。

読み本系『平家』諸本には見られないが、語り本系には、中院本を除いて、「あないとをし、武芸にも歌道にも達者にておはしつる人、あたらず大將軍を」(高野本)という、武道にも歌道にも長けた忠度の死を惜しむ、敵味方の哀愴の意を込めた称賛のことばがある(但し、百廿句斯道文庫本には「糸借や平家ノ一門ノ中ニハ、歌道ニモ達者ニテマシクツル物ヲ」とあり、忠度の武芸を歌道と並べて称することはない)。従つて、(忠度)における「文武二道」とは、この『平家』の本文を承け、歌道と武道とに優れていたことを意味すると考えられる。しかし、『平家』において「文武二道」とは、例えば次のように用いられているのである。

木曾大に悦て、手書に具せられたる大夫房覚明をめして、「義仲こそ幸に新やはたの御宝殿に近付奉て、合戦をとげむとすれ。願書を一筆かいてまいらせばやおもふはいかに」。覚明、「尤然るべう候」とて、馬よりおりてかゝんとす。覚明が体たらく、かちの直垂に黒革威の鎧きて、黒漆の太刀をはき、廿四さいたるくろほろの矢おひ、ぬりごめ藤の弓脇にはさみ、甲をばぬぎたかひもにかけ、えびらより小碓たゝふ紙とり出し、木曾殿の御前に畏て願書をかく。あはれ、文武二道の達者かなとぞみえたりける。

(高野本巻第七「願書」)

齊院次官親能ハ矢面ニ立テリ懸テ、散々ニ戦ケリ。平家方ヨリ誰トハ不知、武者一人立出テ、「親能ハ右筆ノ道計ゾ知タルラン。弓矢ノ方ヲバ知シ物ヲ」ト申タリケレバ、敵モ御方モ一同ニハトソ咲タリケル。親能申ケルハ、「文武ノ二道ハ即定惠ノ二法ナルベシ。文狐仁頼ノ礼ヲ知トモ、武又逆徳ヲ静メズハ、争カ国土ヲ可改。一モ闕テハア

ルベカラズ。鳥ノ二ノ翅ノ如シト云ヘリ。親能ハ文武二道ノ達者也。所見ナシトソ申ケル。是ヲ聞モアヘズ、「イサトヨ詞ニハニズヤ有ラン。手ナミヲミバヤ」トソ云ケル。親能申ケルハ、「幼少ノ昔ヨリ長大ノ今ニ至ルマデ、頭ニ五常ヲタシナシ、内ニ武勇ヲ懸タリキ。尾龍ガマシゲナルシレ者ニ手ナミ見セム」トテ兵ヲ射ル。アヤマタズ類骨射サセ、ドウド倒ル。

(延慶本第六本「檀浦合戦事付平家滅事」)
高野本に見える「文武二道」は義仲の右筆たる大夫房覚明を評したものであり、延慶本の「文武二道」は頼朝方の右筆齋院次官親能のことばである。共にその「文」の意味するところは、右筆としての才覚、つまり能書や学問等のことであり、詩文や歌といった文芸を意味するものではない。

他の軍記作品の例も見てみたい。

左大臣殿仰ラレケルハ、「為義ガ重々申状、尤可然。但、我君ハ、天照大神四十七世ノ正胤、太上法皇第一ノ皇子也。恐ハ、文武トモニカケ、芸能一モ御座又四宮ニ位ヲコサレテ渡ラセ給事、神慮ノ御謬力、人望ノ遺恨、只此事ニアリ。

(半井本『保元物語』上「主上三条殿ニ行幸ノ事付官軍勢汰ヘノ事」)
いにしへより今にいたるまで、王者の人臣を賞ずるは、和漢兩朝をとぶらふに、文武二道を先とせり。文をもつては万機のまつりごとをおぎのひ、武をもつては四夷のみだれをしづむ。しかれば、天下をたもち国土をおさむること、文を左にし、武を右にすとぞ見えたる。たとへば人の二の手のことし。「も欠けてはあるべからず。

(陽明文庫本『平治物語』上「信頼・信西不快の事」)
判官これを見給ひて、「奇異の事の見知りたりけるにや。何処にてこれをば習ひけるぞ」と仰せられければ、「桜本僧正のもとに候ひし時、法相、三論の遺教の中に書きて候」とぞ申しける。「あはれ文武二道

の碩学や」とぞ申しける。

(田中本『義経記』巻第五「吉野法師判官を追ひかけ奉る事」)
『保元物語』の「文武トモニカ」くは為政者としての才能に欠ける後白河天皇のことを難じてのことであり、『平治物語』は冒頭にこの本文を掲げ、政道における「文」と「武」とに優劣はないことを説き、続いて唐の太宗文皇帝が武士の功に報いた例を挙げ、「武」の価値というものを示す。『平治物語』の例が『帝範』や『明文抄』等の帝王学に関する書との関係が認められるように、いずれも国を治める戦略や政道の内容を述べる中で用いられ、「文武二道」を備えるということは称賛に値することであるという価値観があらわされている。『義経記』の「文武二道の碩学」とは、仏典を修した弁慶を称えている。つまり、「文武」又は「文武二道」と、「武」と対置せられる「文」とは、為政の学問を意味している。

しかし、謡曲〈忠度〉のシテ忠度に関する「文」とは、先に掲げた『平家』に描かれる忠度像や、『今物語』等の説話集に見られる忠度の姿から見ても、為政等のための学問ではない。冒頭に掲げた『謡抄』は、「文武二道ヲウケタマヒテ 文ハ文学ノ道也。武ハ武芸ノ道ナリ。」と「文」を学問のこととして注記しているが、やはり、忠度においての「文」とは文芸、すなわち歌道を指すと捉えるべきである。

それでは、謡曲〈忠度〉にいうような、歌道という意味の「文」でもって「武」と対置せられる「文武二道」とは、いつ頃から見られることばなのであるうか。

説話集を見ると、『今昔物語集』巻第二十三・二十五をはじめとして、『古事談』『古今著聞集』等に収められた初期の説話に見られる武士は、京の貴顕には、その才芸が異様・恐怖などといった目で語られている。しかし、十三世紀中頃に成立したと考えられる『十訓抄』は、それまでの説話集等

とは異なり肯定的に武士の姿を捉え、その中で歌道等の文芸と「武」とを対置させ「文武二道」ということばを用いている。

次の『十訓抄』第十所載の「才芸を庶幾すべき事」という徳目が掲げられている説話を見てゆきたい。

また、もとより猛き人の家に生れぬる、養由が芸をつぎ、李広が跡を伝ふるほか、なにごとをかは学び習はむと思へども、それしも文を兼ね、歌を好むたぐひ、いとどいみじくこそ。

清原滋藤は、その身、征夷使軍監の武芸にいたりしかども、文のかた、たくみなりけり。ある時、詩の落句に作れり。

一文一武俱迷道 為我邯鄲步漸窮 (十ノ五十四)

この十ノ五十四話は、武人といえども文芸の才能を備えていることを好ましい、とする考えを示すことに始まる。ここに見える「文」は、詩文や和歌などの文芸のことである。その人物の例として掲げられているのが、平安中期の武将であり漢詩人であった清原滋藤である。滋藤は詩文という「文」の才能を備えた「武」の人であった。その滋藤自身が「一つは文、一つは武、俱に迷へり」と、道に迷い叶わなかつたという無念の思いを詠んでいるように、詩文の才という「文」と武芸の「武」とを、共に備えていることが理想であった。「文」と「武」を共に備えたいという意識を持った武人が、早く平安中期にいたとし、滋藤を「文」と「武」とを兼ね備えていた武人とするのだが、これは後代の『十訓抄』の編者の評価であることに注意しておきたい。

続く『十訓抄』十ノ五十五話は、

鎌倉右大将、父子ともに、代々撰集に入り給ひけるこそ、ことにやさしけれ。なかにも右大将、都へ上り給ひけるに、吉水大僧正、「なにごととも、思ふばかりはえこそ」など、聞えられたりける返事に、

陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつくしてよ壺の石ぶみとよまれたる、おもしろく、たくみにこそ聞ゆれ。

およそ武士といふは、乱れたる世を平らぐる時、これをさきとするがゆゑに、文にならびて優劣なし。朝家には文武二道をわきて、左右のつばさとせり。文事あれば、必ず武備はる謂なり。かかりければ、もろこしにも、後漢の武王は武將二十八人をえらび定められ、麒麟閣をおきて、勲功をしるされける。舜帝の時、八愷、八元と名づけて、十六族の文士をえらばれしがごとし。

源順が右親衛源將軍、初めて論語を談する時、

職列_二虎牙_一 雖_レ拉_二武勇_一於漢四七將_一

学抽_二鱗角_一 遂_レ味_二文章_一於魯二十篇_一

とぞ書けりける。文武ともなる心なり。 (十ノ五十五)

という話である。この話では、優れた和歌の才能を備えた武人の代表として頼朝・実朝父子が挙げられ、頼朝の詠い振りが称賛されるのである。そして、先に掲げた『平治物語』の冒頭と同じように、「文武二道」に触れ、「文」と「武」の間には優劣がないことを説く。

だが、『平治物語』とこの『十訓抄』の話がいう「文武二道」とは、その「文」の指すところが異なっている。前の五十四話では詩を掲げ武人の詩文の才能に触れ、この五十五話では歌を掲げて武人の和歌の才を称えるのであり、ここでいう「文」とは歌道のことである。『平治物語』に見られた為政の学問という意での「文」をいう「文武二道」が、『十訓抄』では文芸の「文」を指す「文武二道」として用いられている。「文武二道」の「文」が、文芸という和歌をも指すまでに意味が拡がっていることは注目される。「文武二道」ということばが、その用法や意味内容が拡大して用いられ、その「文」が歌道などの文芸をも意味するようになったという

ことであろう。その傍証が、先に掲げた『義経記』の例である。『義経記』の「文武二道」の「文」は、『平治物語』の例と同じように、やはり学問の意味で用いられている。

又、源順の詩には、先の『十訓抄』五十四話と同じく、文武兼備という理想が詠われているが、これも『十訓抄』の評価する「文武二道」という価値観でもって、右親衛源将軍源延光が再評価されているわけであり、『十訓抄』の編者の目には、源頼朝・実朝親子こそが「文武二道」の武人と映っているのである。「文武二道」を説く上で唐土の例が引かれ、本朝においては、過去の漢詩人の例を探るほかない程に具体的な例の乏しい中で、頼朝・実朝親子が「文武二道」を備えた武人として掲げられ、その歌をもつてまで「文」を備えた武人であることが例証されるのである。しかも、続く十ノ五十六話には、源頼政の退治の話が続き、頼政の「文」の才が描かれる。

又、「文武二道」の「武」の方に目を向けてみると、「およそ武士といふは、乱れたる世を平らぐる時、これをさきとするがゆゑに、文にならびて優劣なし」、「文事あれば、必ず武備はる謂なり」、「後漢の武王は武將二十八人をえらび定められ、麒麟閣をおきて、勲功をしるされける。舜帝の時、八愷、八元と名づけて、十六族の文士をえらばれしが」とし」とあるように、『十訓抄』の編者は伝統的な「文」の価値を踏まえた上で、「武」が「文」と同等の価値を持つと主張している。五十五話は最後に『左氏伝』の醜かつた賈大夫が弓芸でもって妻を微笑ませた話を収めている。「武」の価値を取り立て「文」と並べて示そうという意図が読みとれる。

以上のような点から考えて、「武」の価値を歌道という意味での「文」の価値と対置させて「文武二道」といい、「文」の才能を「武」と同等に備えていることが武人として優れているとする考えは、『十訓抄』をさほ

ど遡らない頃に成立したと見てよい。そのような中で、頼朝・実朝父子や頼政は、正に「文武二道」を備えた武人の典型として『十訓抄』の中で称えられているのである。

源頼政については詳述しないが、『十訓抄』においても、『平家』においても、頼政はすでに文武兼備の人としての造型が定着しており、謡曲〈頼政〉にも「さしも文武に名を得し人なれども」とある。

これに対して、忠度の場合は、『十訓抄』一ノ十六話に、前節に掲げたような内裏女房との和歌の贈答の話で登場するものの、文武兼備の人としては位置づけられておらず、その造型は風流の人、歌人忠度である。説話においても『平家』においても、忠度は歌人としての造型が行われている。読み本系『平家』は、「忠度都落」では歌人つまり「文」の人忠度としての造型を、「忠度最期」では武人つまり「武」の人忠度としての造型が中心となり、平忠度という一人の人物の造型としては溶け合わない。それに対して、語り本系『平家』の「忠度最期」の章段は、忠度の最期のさまが、念仏と辞世的な意味合いを持った詠草とを柱として語られ、「文」の人として、「武」の人として、忠度に一人の理想的な武人の資質を備えさせようという志向がある。忠度譚の、読み本系『平家』から語り本系『平家』へという方向は、この「文武二道」という価値観の変遷とも考え併せることが出来るのである。

五 謡曲〈忠度〉における「武」のありよう

では、歌人として着れ高い忠度の武人としての側面について、謡曲作者はどのようにしてその「武」の価値を高め、忠度の「文」と対置させているのだろうか。先に分析した『平家』「忠度最期」と比較して、謡曲〈忠度〉における「武」の描かれ方を考えてみたい。

謡曲(忠度) 結末の九段において、シテ忠度と岡部六弥太の組討ちのさまが、以下のように描かれる。

〔クリ〕^{地盤さるほどに}一の谷の合戦、今はかうよと見えしほどに、皆々舟に取り乗つて海上に浮かむ。

〔語り〕シテわれも舟に乘らんとて、汀のかたにうち出でしに、う

しろを見れば、武蔵の國の住人に、岡部の六弥太忠澄と名のつて、六七騎にて追つ掛けたり、これこそ望む所よと思ひ、駒の手綱を引つ返せば、六弥太やがてむずと組み、両馬が間にどうと落ち、かの六弥太を取つて抑へ、すでに刀に手を掛けしに

〔哥〕^{地盤六弥太が郎等、おんうしろより立ち回り、上にまします忠}

度の、右の腕を打ち落とせば、左のおん手にて、六弥太を取つて投げ除け、今はかなはじと思しめして、そこ退き給へ人びとよ、西拝まんと宣ひて、光明遍照、十方世界念仏衆生、撰取不捨と宣ひし、おん聲の下よりも、痛はしやあへなくも、六弥太太刀を抜き持ち、終におん首を打ち落とす。

後を追つてきた六弥太に、シテ忠度は「これこそ望む所よ」と引き返す。忠度は六弥太を自らが組む敵として認め、自ら進んで組むのである。

先に見たように、『平家』諸本には、六弥太を自らの敵として認めるというような忠度の姿は描かれていない。六弥太を自らが組む敵としては不相应な者として、或いは無駄な殺戮を避けるためか名乗りを求められてもその名を隠し、六弥太から逃れようとする。謡曲(忠度)のこの組討ちの場面のシテ忠度の姿には『平家』の忠度像とは大きな違いがある。ここは、謡曲(忠度)作者の手による、本説からの改変、創作点と認めて良い。この忠度像の改変にはどのような意図があるのだろうか。

『平家』の忠度が「御かたにてあるぞ」と語つたのは、無益な殺戮を避

ける忠度の姿を描こうと『平家』作者が意図したのかも知れない。しかし、謡曲作者はそうは解さなかつたとみえる。謡曲作者は、六弥太を避ける忠度を、延慶本などにあつたように、「ギタナ」しと解したのである。その忠度の姿を、武人として潔しとしなかつたが故に、敵に背を向けず、自ら堂々と組んでゆく、そのような忠度像の改変が行われたものといえる。

一步踏み込んで考えてみると、この本説からの忠度像の改変は、謡曲作者の思い描く理想とする武人観があらわれたものといえる。忠度ほどの名將は敵に背を向けるべきでなく、堂々と迎え打つべきである、そのような謡曲作者の意図がはたらいたものとみえる。そのため(忠度)においても、続く六弥太との組討ちの場面では『平家』の忠度像は継承され、忠度は郎等に片腕を斬られても残つた腕一本で六弥太を投げ除けるという怪力を示し、その間に西に向かい最期の十念を唱え、自ら死を迎える。武人としての剛勇や、阿弥陀仏に極楽への引扱を願ひ死を迎えるという、いわば死の作法といったものを整える忠度の姿は、そのまま採り入れられている。こういった忠度の姿は、語り本系『平家』の語り手と同様、謡曲作者の思い描く理想とする武人の「武」のありようでもあつたと考えてよい。

忠度は、本説である『平家』などにおいて、「文」に優れた歌人として名高いが、武人としてもその「武」のさまは称賛されるに十分値するものであつた。これが「忠度都落」ではなく、「忠度最期」から多くの本文を詞章に採り入れ、忠度の武人としての面をも積極的に描き、シテ忠度を「文武二道」の人とした謡曲作者の意図であつたのである。シテ忠度を「文武二道」の人として明確に位置づけ、「文」をも、「武」をも、共に備えた武人こそが、称賛に値する武人であるということを示している。「文武二道」とは、武人に対する謡曲作者の価値観をあらわしたことばなのである。又、シテ忠度を、理想的な「文武二道」の武人として描くことで、謡曲作者な

りの忠度哀悼の意を反映させているとも解せるのである。

修羅能では、一般にシテの武人性は、修羅道に随ちることとなつた悪因として解されることが多く、謡曲作者は「武」に対して厳しい、否定的な目を向けていると説明されることが多い。しかし、シテ忠度が「文武二道」の人である以上、その武人としての「武」の長けたさまを描くことは、決して武に対する否定的な意味のみではあるまい。「文」と「武」とを対置すべく、シテ忠度の武勇を描くことは、むしろ「文武二道」という武人の理想像を、実体をもって示すためには必要なことと言えるのである。

又続く、シテ忠度を討つた岡部六弥太の詞章も注目される。

シテ六弥太心に思ふやう、

地獄痛はしやかの人のおん死骸を見奉れば、その年もまだし

き、長月ごろの薄曇り、降りみ降らずみ定めなき、時雨ぞ通ふ

斑紅葉の、錦の直垂は、ただ世の常によもあらじ。いかさまこ

れは公達の、おん中にこそあるらめと、おん名ゆかしきところ

に、箆を見れば不思議やな、短冊を付けられたり、見れば旅宿

の題を据ゑ

「上ノ詠」地獄行き暮れて。木の下蔭を宿とせば。

シテ花や今宵の、主ならまし

「冊」シテ忠度と書かれたり、

地獄さては疑ひ嵐の音に、聞こえし薩摩の、守にてまずぞ痛は

しき。

シテ忠度が自分を討つた六弥太の心情を語るといふ、興味深い語りの構造であるが、ここには『平家』諸本には全く見られなかつた六弥太の造型が見られる。(忠度)では、シテ忠度の死について、六弥太は「痛はし」といふ哀悼の気持ちを吐露している。読み本系『平家』に顕著であつた六弥

太の勲功譚という性格は、ここには全く見られない。語り本系にあつたような合戦場の周囲の人々の忠度哀悼の気持ち、忠度を討つた六弥太その人の気持ちとして語られているのである。『平家』で、自らが討つた首を太刀の先に差し貫き、自らの勲功を意識しつつ首の名を求めたり、これから討とうという忠度にその名を問ひ詰める六弥太の姿はどこにもない。六弥太は哀惜の念をもつて、その討つた首の名を「ゆかし」と求めるのである。第三節で指摘したような語り本系『平家』の「忠度最期」の結び方を継承せず、六弥太その人に哀悼の念を語らせることで、謡曲(忠度)が『平家』の忠度譚よりも明確に哀悼譚としての性格を示し得たと言える。

この六弥太についても、本説である『平家』にはもともと無かつた六弥太像を謡曲作者が造型したと捉えるべきである。盛衰記に描かれた六弥太は、忠度に臨終正念の時間を与えるという、心ある人物としても描かれている。六弥太像の変容がはじまつている。しかし、勲功に勇んだ六弥太が、討つた相手の平家の公達を憐れむ、優しい心を持った武人として描かれるという六弥太像の改変は、謡曲(忠度)において完成されたのである。謡曲(忠度)において、武人の戦いのさまや心というものは、このように大きな創作が施されている。

『能本作者註文』に内藤藤左衛門作と伝える、同じ『平家』の忠度に題材を求めた(俊成忠度)がある。この曲は、ワキ岡部六弥太が京五条の俊成邸を訪れ、自ら討つた忠度の尻籠に残されていた「行き暮れて」の歌の書かれた短冊を、俊成に届けるという設定で始まり、そこへ(忠度)の忠度像を承けた「破戒無愆の罪を恐れ、仁義礼智信、五つの道も正しくて、歌道に達者たり弓矢に、名を揚げ」という「文武二道」の人シテ忠度があらわれる。当時の歌壇の最高指導者たる俊成と一介の侍にすぎない六弥太の対面という設定それ自体も興味深い、先に見たような謡曲(忠度)

における忠度の死を悼む心ある武人六弥太の造型が先行していなければ、
 〈俊成忠度〉の六弥太が俊成邸を訪れるという設定が生まれることはなかつたと思われる。謡曲〈忠度〉で造られた六弥太像が、歌人の心を解する武人六弥太をワキに仕立てる〈俊成忠度〉という曲に継承されたといえる。

謡曲〈忠度〉は、本説である『平家』の意図するところが、単にかたちを変えて謡曲に仕立て直されているわけではない。『平家』を本説としつつも、謡曲作者自らの価値観や感覚をもって『平家』に描かれた歌人平忠度を解釈し直し、歌人としての忠度の「文」のみならず、忠度本来の武人としての「武」にも目を向け、自らの理想の武人観を託して、新しい忠度像を提示しているのである。

その忠度像創出の方向は、読み本系『平家』から語り本『平家』へと至る忠度像の変遷とも重なる部分があるといえよう。語り本系『平家』には、敵方六弥太の武勳譚的性格を除き、討たれた忠度への視線を強めたものの、歌人忠度と武人忠度との姿を、一人の理想的な武人像として融合しきれない弱さがあった。その『平家』の示した改変への志向を十分に汲み取った謡曲作者が、〈忠度〉において、「文武二道を受け」た理想的な文武兼備の武人として、平忠度をより明確に位置づけ得たということが出来るのである。

世阿弥が『三道』において「軍体の能姿。仮令、源平の名将の人体の本説ならば、ことにく平家の物語のまゝに書べし」と言ったのは、以上に考えたような、本説『平家』からの離れをも含めてのことであったと見てよからう。

〔注〕

- 1 謡曲〈忠度〉は、横道萬里雄氏・表章氏校注、日本古典文学大系『謡曲集上』所収の小宮山藤右衛門元政本(天正頃写、上掛り)を底本とした。段・小段構成も便宜上、同書に従う。
- 2 日本庶民文化史料集成『第三巻 能』に掲げる。
- 3 「室町時代の平家物語―謡曲詞章との関係から―」(『平家物語研究序説』明治書院、昭和四十七年、所収)。
- 4 『観世』昭和五十一年三月。
- 5 梶原正昭氏「『平家物語』と芸能―室町・戦国時代の琵琶法師とその芸能活動―」(『あなたが読む平家物語』5)有精堂、一九九四年、所収 等に詳しい。
- 6 『平家物語』の本文は、全て公刊された本文に掲げる。その呼称・略称は、通例に従った。
- 7 本稿のような立場で、謡曲の本説としての『平家物語』を捉える必要性を説くものに、西野春雄氏「能の作者と作品」(岩波講座『能 狂言』所収)等がある。本説としての『平家物語』に関して、近年様々な見解がある。表きよし氏「語り本と能楽の詞章」(『國文學解釈と教材の研究』平成七年四月)、岡田三津子氏「1400年前後―応永・永享期の軍記物語―謡曲(教盛)を端緒として」(『國文學解釈と教材の研究』平成十二年六月)等をご参照いただきたい。
- 8 覚一本の文芸的完成度について、砂川博氏が「覚一本平家物語の文芸性―忠度都落を読む―」(『平家物語新考』昭和五十七年、東京美術所収)、「忠度都落」の場面の語りの構造について、志立正知氏が「平家物語」における場面描写の方法」(『軍記と語り物』第三十号、一九九四年三月)で論じておられる。
- 9 本説の各説話間の異同については、三弥井書店刊、中世の文学『今物語・隆房集・東斎隨筆』所収『今物語』補注七・八の項に詳しい。
- 10 稿新書『平家の群像』一九六七年。
- 11 新日本古典文学大系、『保元物語』現存諸本の成立は、『六代勝事記』の成立時である貞応二(一一二二)年をもつて上限とする説が有力である。
- 12 新日本古典文学大系、『平治物語』は、寛元四(一一二四)年には伝存したことが確認されている。
- 13 新編日本古典文学全集、『義経記』の成立については、現在は室町初・中期成立という説が有力である。
- 14 『日葡辞書』では「文武」は「ブンブ」と読んでいる。「ブンブ」・「ブンブガニドウ」等の項目が立てられているが、いずれも「ブン」は学問とされている。
- 15 浅見和彦氏校注・訳、新編日本古典文学全集所収の宮内庁書陵部蔵片仮名本の本文に掲げる。『十訓抄』は建長四(一一五二)年の成立である。